

2024年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・一般選抜) 問題

専門科目 日本文学 専攻分野

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

2024年度

成	
績	

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・一般選抜) 問題

専門科目 (日本文学 専攻分野)

- (注意事項) ① 第一問の解答は、答案紙二十行程度を標準とする。
- ② 第二問 1 から 5 までの解答は、それぞれ答案紙八行程度を標準とする。
- ③ 第五問の解答は、答案紙十七行程度を標準とする。
- ④ 第一問から第五問まで、すべて縦書きで解答すること。

一、「文学」とはいかなるものか、自身の見解を述べなさい。また、その見解が、大学院で行う予定の自身の研究の目的、方法とどのようにかわるのかを説明しなさい。

二、次の事項について説明しなさい。

1 『万葉集』の表記の特徴とその意義

2 和泉式部

3 『太平記』の文学史上の意義

4 元禄期の文学

5 関東大震災と文学

三、次の和歌を翻字し、口語訳しなさい。

あはのふるみはなむいふれ 我うらむ

糸とあそかろめ世残がうらみト

四、次の記述は、『建礼門院右京大夫集』の中の一首の和歌とその詞書である。表現されている情景と心情がよくわかるように、この詞書と和歌の全文を丁寧に口語訳しなさい。

十二月一日ごろなりしやらむ、夜に入りて、雨とも雪ともなくうち散りて、村雲騒がしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり。引き被き臥したる衣を、更けぬるほど、丑二つばかりにやと思ふほどに、引き退けて、空を見上げたれば、ことに晴れて、浅葱色なるに、光ことごとしき星の大きなが、むらもなく出でたる、なのめならずおもしろくて、花の紙に、箔をうち散らしたるによう似たり。今宵初めて見そめたる心地す。先々も星月夜見なれたることなれど、これは折からにや、ことなる心地するにつけても、ただ物のみ覚ゆ。
月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれを今宵知りぬる

五、 次の文章は、野間宏「顔の中の赤い月」〔総合文化〕第一巻第二号、昭和三二年八月）の冒頭部である。この小説を読み解く上で重要なポイントとなり得ると考えられる事項（モチーフ）と表現・語りの特性について、本文の記述を抜き出しながら説明しなさい。なお、複数の事項（モチーフ）や表現等を取り上げてもよい。

著作権の都合上、この部分をご覧いただけません。

以上